雑草？コナギ

木村信之

いま話題になっている有吉佐和子さんの新聞小説〈複合汚染〉に、この間、埼玉県上里町の須賀さんの特殊な稲作りのことが出ていた。須賀さんは田んぼにコナギを生やして、そのお陰で除草もせず化学肥料も使わずに、県平均の収量を上げているという。

「田んぼにコナギが生えてくればもうしめたもので、収量も上るし、ウマノケ（マツバイの類か）もカヤツリグサも消えて、もう何年でもコナギしか生えなくなります。コナギはイネと仲がいい草なんですよ。」

と、須賀さんはコナギの茂る田んぼで、有吉さんに説明していた。

これを読んで私は、四年前の夏に出会った町はずれの川近い休耕田を埋めつくしていたコナギの群落を、ふと思い出したのである。

朝であった。濡れたコナギの緑濃いつややかな葉は、静かに流れるうす霧の底に、ひしひしと田の面を被いつくしていた。

コナギといえば、除草剤に弱くて、よく見受けるのは、稲刈りのすんだひろびろとした田のすみに、からくも薬禍を免れたごくわずかな株が、澄んだ青紫の花をつつましくつけているといったもので、間もなく消え去るのではないかという懸念を持たせるようなはかなさの見える姿だったが、休耕田のその大群落には、草の命の底知れぬ力が充ちあふれていて、それはまた、余裕を失くした人間の非常な仕打ちへの強い抗議のデモのようにも思われるのであった。

およそ二千年も前の遠い昔、南の島からイネを持ってわが本土へ渡ってきた人びとがあったが、コナギはその時イネのお伴をしてきたのであろうといわれ、前川文夫博士のいう史前帰化植物の一つとされている。

昔、コナギは菜として食膳に上り、花は染料にされ、時には思う女にたとえられて歌にも詠まれたりして、親しまれたものであった。

〈和名抄〉には、水葱（ナギ―コナギの古名）は水菜の部にセリなどと共に載せてあり、〈延喜式〉の内膳司の部には、供奉雑菜の中にあり、ナスなどと同じく糟漬にしたことが載っている。また、万葉集には〝水葱のあつもの〟が出ている。江戸の末期薩州島津候が農事奨励